

こうもり
蝙蝠はいつからめでたい
ものとなったのか？

経営学部
矢田 博士

一、はじめに

近頃ではあまり見かけられなくなってしまっ
たが、筆者が子どもの頃には、黄昏時になると
どこからともなく現れて、大空を自在に舞い飛ぶ
数多の蝙蝠の姿を、よく目にしたものだ。とり
わけ夕焼けの日には、空の茜色を背景にその姿が
くっきりと映し出され、それはそれは美しい光景
であった。

みなさんは蝙蝠に対してどのような印象をお持ち
であろうか。あるいは、闇夜に活動し中には動物
の生き血を吸う種類もいることから、吸血鬼ド
ラキュラを連想させる不気味な生き物と捉える人
もいるであろうし、あるいは、鳥でもなく獣でも
ないその異様な姿から、日和見的なずるがしこい
者の象徴として捉える人もいるであろう。いずれ
にしろ好い印象を抱いている人は、それほど多く
はないのではなかろうか。

二、中国の韻文作品における蝙蝠

*

ところで、中国の文学作品の中では、蝙蝠はど
のように描かれているのであろうか。その点を筆
者が研究対象としている韻文作品（詩賦）を中心
に概観してみたい。

中国の韻文作品で、蝙蝠を詠み込んだ最も早い
時期のものは、おそらく魏の曹植（一九二～二三
二）の「蝙蝠賦」であろう。以下、その全文を掲

げるが、早期の作品だけに四字分の欠落（□で示
す）がある。

吁何奸氣	あ いず よこしま 吁あ 何れの奸な気ぞ
生茲蝙蝠	こ 茲の蝙蝠を生ぜしむ
形殊性詭	こと たが 形は殊なり 性は詭い
每變常式	つね 毎に常式を變ず
行不由足	よ 行くには 足に由らず
飛不假翼	か 飛ぶには 翼を假りず
明伏暗動	明に伏し 暗に動く
□□□□	…… ……
盡似鼠形	尽く鼠の形に似
謂鳥不似	鳥といへばも似ず
二足爲毛	二足にして毛たり
飛而含齒	飛びて齒を含む
巢不哺鷦	ひな はく 巢にては鷦を哺まず
空不乳子	あな やしな 空にては子を乳わす
不容毛羣	い 毛群に容れられず
斥逐羽族	せきちく 羽族に斥逐せらる
下不蹈陸	くだ ふ 下るも陸を蹈まず
上不馮木	のぼ よ 上るも木に馮らず
〔韻字〕	蝠・式／足・翼・□／似・齒・子／ 族・木

《ああ、いったいいかなる邪な気が、この蝙
蝠という生き物を生み出したのだろうか。異
様な姿に奇異な性質、これまでの習わしを一
つ一つ変えてしまう。歩く時には（獣の）足
を使うでもなく、飛ぶ時には（鳥の）翼を借
りるでもない。明るいうちは潜み隠れ、暗闇
の中で動きまわる。……。姿はことごとく鼠
に似ており、鳥と名づけるには似ていない。
（鳥のように）二本足でありながら（四本足の）
獣のようであり、（鳥のように）空を飛ぶも
の、口の中には（獣のように）齒がはえて
いる。巢のなかでは（鳥のように）雛に口移
して餌をやることもせず、穴のなかでは（獣
のように）子どもに乳を飲ませることもしな
い。獣の仲間にも受け入れられず、鳥の仲間
からも追いやられる。下において（獣のよ

うに) 地を歩くことはせず、飛びあがっても(鳥のように) 木に止まることはない。》

「賦」は韻文様式の種類で、賦に詠まれる事物について、それに関連する諸々の要素を敷き連ね、その事物のありようをつぶさに描き出すことを特徴とする。曹植の「蝙蝠賦」を例にとれば、蝙蝠の生態が、曹植の観察を通して、一つ一つ具体的に列挙されていることが確認できるであろう。曹植が列挙する蝙蝠の生態が科学的に正しいかどうかはともかくとして、ここでは曹植が鳥でもなければ獣でもない蝙蝠の異様な形状に着目し、それを邪な気が生み出したものと捉えていること、また鳥からも獣からも仲間はずれにされる嫌われ者としての側面を取り上げていることを、確認しておけばよいであろう。

ところで、曹植の「蝙蝠賦」を読んで、「尽く鼠の形に似、鳥と謂うも似ず」の箇所に至るごとに、子供の頃に読んだイソップ物語の中の「蝙蝠と鼯」の話の思い出す。そのあらすじは、以下の通りである。

《地面に落ちた蝙蝠が鳥嫌いの鼯に捕まってしまった。鼯が鳥だと思って食べようとする、蝙蝠は翼をたたんで鼠のふりをしたため、命拾いをした。しばらくしてまた地面に落ちた蝙蝠は、今度は鼠嫌いの鼯に捕まってしまった。すると今度は翼をひろげて鳥のふりをしたため、またまた命拾いをした。》

蝙蝠を鼠にも鳥にも似た生き物として捉えている点に、曹植の賦との発想の類似性が認められよう。ただし、曹植の賦が蝙蝠の存在を否定的に捉えているのに対して、この「蝙蝠と鼯」の話では、末尾に臨機応変に対処することの大切さを説く教訓が付されており、蝙蝠の機転を評価している点に、曹植の賦との差異が見られるようである。

またさらに、曹植の「蝙蝠賦」を読み進めて、「毛群に容れられず、羽族に斥逐せらる」の箇所に至るごとに、同じくイソップ物語の「蝙蝠と鳥と獣」

という話を思い出す。そのあらすじは以下の通りである。

《鳥と獣が戦争をした。蝙蝠は、鳥が優勢と見るや、鳥の味方をし、獣が優勢と見るや、獣の味方をした。やがて戦争が終わり、その行為が鳥と獣の知るところとなり、蝙蝠は鳥からも獣からもつまはじきにされることとなった。》

こちらの方は、蝙蝠を鳥からも獣からも仲間はずれにされる生き物として捉え、その存在を否定的に描いており、曹植の賦との類似性がよりはっきりと確認されるであろう。

＊ ＊

先秦から隋代までの詩賦作品の中で蝙蝠が登場するのは、前に掲げた曹植の「蝙蝠賦」を除けば、梁代の詩に一首見られるだけである。しかもそれは風景描写の一つの素材として描かれているにすぎず、蝙蝠そのものを主題としたものではない。唐代になると、蝙蝠を詠み込んだ詩が二十例と複数の例が確認されるが、そのほとんどは、やはり風景描写の一素材としてのものである。ただし、その中にわずかに二例ではあるが、蝙蝠そのものを主題とした詩が見られる。すなわち、元稹(七七九～八三一)の「有鳥二十章・其九」と白居易(七七〇～八四六)の「洞中蝙蝠」がそれである。では、元稹と白居易の詩には、どのように蝙蝠が詠まれているのだろうか。以下、順に確認してみよう。

有鳥二十章・其九	元稹
有鳥有鳥衆蝙蝠	鳥有り 鳥有り 衆 <small>あまた</small> の蝙蝠
長伴佳人占華屋	長に佳人に伴い 華屋を占む
妖鼠多年羽翮生	妖鼠 多年 羽翮 生じ
不辨雌雄無本族	雌雄を弁えず 本族も無し
穿墉伺隙善潛身	墉を穿ち隙を伺い 善く身を潜ましむ

晝伏宵飛惡明燭 昼には伏し 宵には飛び
 明燭を悪む
 大廈雖存柱石傾 大廈 存すと雖も 柱石
 傾く
 暗齧棟梁成蠹木 暗かに棟梁を齧み 木を
 蠹むを成す
 ([詩形] 七言古詩 / [韻字] 蝠・屋・族・
 燭・木)

《鳥がいる、鳥がいる、たくさんの蝙蝠が。いつも優れた御方にまわりつき、華麗な御殿に住み着いている。長い年月を生きぬいた妖しげな鼠に羽が生えたものが蝙蝠で、雌雄の区別も付かず、鳥の族でもなければ獣の族でもない。垣根の土壁に穴をあけ、隙を伺い上手に身を隠す。昼には隠れ棲み夜には舞い飛び、灯火の明かりを嫌う。大きな家屋は建っているものの、その屋台骨は傾いている。それは蝙蝠がひそかに棟木と梁とを齧り、木をぼろぼろにしてしまったからだ。》

元稹もまた、曹植と同様、蝙蝠の「本族も無し」といった側面に着目していること、また棟木と梁を齧って家屋を傾ける好ましからぬ存在として、蝙蝠を描いていることが、まずは確認されるであろう。さらに、「佳人」はここでは皇帝を、「雌雄の区別も付かない蝙蝠」は宦官を、それぞれ比喻していよう。宦官とは、皇帝の身の周りの世話をす去勢された男子で、しばしば皇帝に取り入っては権力を握り、国政を私物化しては亡国に導くことから、国政を与る士大夫(官僚)層にとっては、はなはだ嫌悪すべき存在であった。「長伴佳人」は、常に皇帝の側にまわりついている宦官の様子を表し、「宵飛」は、宦官が国政を裏から操っている様子を暗示していよう。元稹は、「大廈の棟梁を齧って柱石を傾ける蝙蝠」を詠むことによって、「国政を舞台裏から操り、国家の屋台骨を傾ける宦官」を批判しようとしたのである。

元稹の詩にも「妖鼠 多年 羽翮 生じ」とあ
 るように、中国では古来、長い年月を生きた鼠が
 蝙蝠に姿を変えると考えられていたようである。
 例えば、『太平御覧』巻九一一「獸部二三・鼠」
 に引く鄭氏の『玄中記』には、

百歳之鼠、化爲蝙蝠。

[百歳の鼠、化して蝙蝠と為る。]

と言い、李白(七〇一～七六二)の「答族姪僧中
 孚贈玉泉仙人掌茶〔族姪の僧中孚の 玉泉の仙
 人掌茶を贈らるるに答う〕」詩の序に引く『仙經』
 には、以下のように言う。

蝙蝠、一名仙鼠。千歳之後、體白如雪、棲則
 倒懸。

[蝙蝠は、一に仙鼠と名づく。千歳の後、体の
 白きこと雪の如く、棲めば則ち倒まに懸かる。]

李白の詩の序に見える「千年を生きた鼠が白い
 蝙蝠に姿を変える」という考えは、実は次に掲げ
 る白居易の「洞中蝙蝠」詩にも踏まえられており、
 以下のように言う。

洞中蝙蝠	白居易
千年鼠化白蝙蝠	千年 鼠は 白き蝙蝠と 化し
黒洞深藏避網羅	黒洞 深く蔵れて 網羅 を避く
遠害全身誠得計	害を遠ざけ身を全うする に 誠に得計なるも
一生幽暗又如何	一生 幽暗 又た如何
([詩形] 七言絶句 / [韻字] 羅・何)	

《千年を生きた鼠は白い蝙蝠に姿を変え、
 真っ暗な洞窟の奥深くに隠れ棲み、捕獲網から
 身を避ける。害を遠ざけ身を全うするには、
 それは誠によい方法ではあるが、一生を暗闇の
 中で過ごして、いったいどうするのだろうか。》

曹植と元稹がその作品の中で、蝙蝠に対する不快感・嫌悪感をはっきりと表していたのに比べ、白居易の場合は、捕獲網から身を避けるため洞窟の奥深く隠れ棲む蝙蝠に対して、それは誠に「得計（よい方法）」だと、一定の理解を示している。しかし、全面的に同情しているかと言えば、決してそうではなく、むしろどちらかと言えばその一生を否定的に捉えていることは、結句の内容から見て明らかであろう。

宋代以降の作品については、『四部叢刊』の索引で調べた限りではあるが、南宋の范成大（一一二六～一一九三）に蝙蝠を主題とした詩が一例みられる程度で、その他の例は、おおむね蝙蝠を素材の一つとして描いているにすぎない。

蝙蝠	范成大
伏翼昏飛急	伏翼 ^{ふくよく} 昏 ^{くれ} に飛ぶこと急なり
營營定苦飢	營營として ^{きだ} 定めて飢えを苦 ^く とするならん
聚蚊充口腹	蚊を聚めて ^{あつ} 口腹を充たすも
生汝亦奚爲	汝を生かして ^{なんじ} 亦た奚 ^ま を ^{なんに} か ^な 為さんや

（〔詩形〕五言絶句／〔韻字〕飢・爲）

《^{こうもり}伏翼は夕暮れ時になるとせわしなく飛びまわる。きっと腹をすかしているのだろう、餌を求めて行ったり来たりとあわただしい。蚊を集めては口と腹を満たしているが、おまえを生かしていったいどうしようというのか。》

「伏翼」は蝙蝠の異名。蝙蝠は蚊を食べてくれるという点において、本来は益獣なのであるが、その不気味な姿からか、范成大もまた白居易と同様、いや白居易以上にその存在を否定的に捉えていることが、結句の内容から確認されるであろう。

以上、蝙蝠を主題として詠んだ詩賦作品を概観

した。そこで明らかになったことは、いずれの作品も蝙蝠を好意的には捉えていないということである。

なお、この点に関連して、唐代の撰者不明の『玉泉子』には、酒宴の席で父親からその容貌をからかわれ、客人の前で恥をかかされた息子が、父親にやりかえした言葉として、以下のような五言の二句が見える。

蝙蝠不自見	蝙蝠 ^{みづか} 自ら見ざるに
笑他梁上燕	他 ^か の梁上の燕を笑う

一蝙蝠は自分の醜い姿に気づかぬまま、
あの梁の上の燕を見て笑っている。一

この句は今日でも「自分のことを棚に上げて他人を嘲笑すること」の比喩として用いられるようであるが、この句もまた決して蝙蝠に対して好意的ではなく、それどころか蝙蝠に対する侮蔑の意がありありと感ぜられよう。

三、おわりに

以上の通り、中国の古典の詩賦作品においては、おおむねマイナスのイメージで捉えられていた蝙蝠であるが、実は今日の中国では、魚や鹿と同様、めでたい生き物として歓迎されている。それは「魚(yú)」が「余(yú)＝余裕」に、「鹿(lù)」が「禄(lù)＝俸禄」に、それぞれ音声面で通じるのと同様に、蝙蝠の「蝠(fú)」が幸福の「福(fú)」に通じるからだそうだ。

では、久しく嫌悪の対象とされてきた蝙蝠が、幸福の象徴として扱われるようになるのは、いったいいつ頃からなのだろうか。明代の陶磁器の中には、蝙蝠を吉祥文として描いたものがすでに見られることから、少なくとも明代まではさかのぼれるようである。しかし、それ以上の詳細については、筆者の力不足で未だ調査がそこまで及んでおらず、残念ながら明確なお答えができない。タイトルに「？」を付したゆえんである。ご存知の方は、ご一報いただければ幸いである。



[図版 1]



[図版 2]



[図版 3]

【注】

[図版 1]

五彩百蝠文壺 万曆（在銘）高さ35.1cm 東京国立博物館
 数知れない蝙蝠こうもりで覆われた大壺。蝠は音が「福」に通じ、吉祥文とされる。細かな単一の吉祥文を全面に描き込み、多くの色で塗り分けた賑やかな壺は、ほかに百鹿（音が「禄」に通じる）文の例がある（『中国の陶磁⑨明の五彩』矢島律子、平凡社、一九九六年、より）。

[図版 2]

粉彩桃樹文碗 雍正（在銘）径14.0cm パウアー・コレクション

器の外内面にかけて連続して文様が描かれる「過枝」と呼ばれる文様構成で、これも景德鎮粉彩独特の表現である。桃は「仙桃」・「寿桃」といわれ長寿の象徴、蝙蝠こうもりは福をあらわしている（『中国の陶磁⑩清の官窯』中沢富士雄、平凡社、一九九六年、より）。

[図版 3]

五福捧寿

五匹の蝙蝠が「寿」という漢字を捧げ持つかのように取り囲んでいる様子を図案化したもの。五匹の蝙蝠は五つの幸福を表している。五福については、『尚書』洪範に以下に言うのを踏まえる。

五福、一曰壽、二曰富、三曰康寧、四曰攸好德、五曰考終命。

〔五福とは、一に寿を^いい、二に富を^いい、三に康寧を^いい、四に好む^{とこ}攸は徳なるを^いい、五に終命^{しゅうめい}を考^をすを^いう。〕

すなわち、「長生きすること」「財産に富むこと」「身体がじょうぶで無事なこと」「徳を好むこと」「自然の寿命を全うすること」を言う。なお、五匹の蝙蝠の間に「卍 (=万字)」の字があるのは、「福」と「寿」とが「万代」続くことを意味している (『中国吉祥図説』王慶豊・陳素・戚相成編著、遼寧大学出版社、一九九〇年、参照)。

ネッシーを探して (?) —スコットランド・ インヴァネス—

法学部
北尾 泰幸

8月下旬に、スコットランド・インヴァネス (Inverness) を旅した。「ハイランド」と呼ばれるスコットランド北部にあり、ロンドンから飛行機で約2時間掛かる。名古屋が北緯35度に位置するのに対し、インヴァネスは北緯57度に位置しているので、ずいぶん北のほうまで行ったことが分かるだろう。8月下旬の日本の気候からは想像できないと思うが、滞在中は長袖シャツにジャケットを羽織るほど涼しかった (しかし、半袖を着た現地の人が少なからずいたのには驚いた…)。

インヴァネスの観光名所をいろいろ旅したが、今回は「ネス湖 (Loch Ness)」に絞ってレポートしたいと思う。「ネス湖」の名は皆さんも聞いたことがあるだろう。恐竜・首長竜に似た未確認動物「ネッシー (Nessie)」が目撃されたことで有名な湖である。未確認飛行物体 UFO 同様、ネッシーはいると固く信じている人もいれば、ネッ

シー物語は捏造であると主張している人もいる。果たして真相はどちらだろうか。ちなみに、ネッシーの最初の記録は、西暦565年キリスト教布教のために訪れた聖コロンバにまでさかのぼるようで、聖コロンバが村人を苦しめるこの怪物を神通力で追い払ったという記述があるそうだ。ネッシーはそれ以来、何度も目撃されているという話が残っている。

私は「怪物」という呼び名からネッシーはオスだと思っていたのだが、どうも現地ではメスと捉えているようで、ネッシーのことを歌った歌ではネッシーに対して代名詞 “she” を用いているし (但し、英語では船を指すのに代名詞 she を用いるため、湖に存在する動物に対して愛着を込め、“she” と呼びかけている可能性もある)、売られているネッシーのぬいぐるみも、メスであることを示すようにリボンなどのかわいい飾りが付けられている。

ネス湖は南北に約38km のびる細長い湖であ

